



動物レスキュー通信

2013年10月 第4号 (平成25年9月1日発行)

発行元
一般財団法人 国連世界動物救済支援機構 詩月財団

詩月(しづく) : 詩月財団 理事長
愛玩動物飼養管理士 一級
お問い合わせ : sizuku.foundation@gmail.com

動物達が人間に 教えてくれる事



動物と関わる事の大切さ

私は小学生時代、「飼育委員」をしていた事があります。飼育委員の役割は、学校にいるウサギと「ワトリ」の世話を毎日する事です。生命ですからお世話はもちろん毎日、休日や夏休みなどは当番制で必ず誰かがお世話をしていました。お正月などひとつりとした学校でお世話をした事も覚えていますが、この飼育委員の経験は今の私にとっても大切な経験だと思っています。子供たちは動物を見ると、「かわいい」や「おもしろい」などと言う感情が生まれませんが、実はそれは別に、原始的、本能的なレベルで動物と繋がっているという事ができます。過去に、ぬいぐるみと本物の動物を用いた様々な実験で、幼児たちはぬいぐるみではなく生きている動物に対する反応の方が積極的であるという結果を出した研究者がたくさんいました。この結果を見て言える事は、まだ自分の意思で何も決める事の出来ない幼児でも、生命とぬいぐるみを無意識のうちに見分ける事ができ、生命に対する感受性が備わっているという事です。しかしその感受性は、幼児の成長過程で動物と接するチャンスがないと、どんどん衰退していきまいます。そうならない為に、親や周りの大人が動物を大事にする手本を見せる事が、本当の情操教育になるはずなんです。

積極的にふれあいを

児童心理学や教育学の専門家たちによって様々な研究報告がされていますが、その結果を見ると、動物達と頻りに接したり、共に生活する事によって、子供たちにとっても良い影響を与えていると言えます。一番ハッキリと結果が見えているのは、「コミュニケーション能力の向上」です。幼少期から動物と接する機会が多かったり、共に生活している子供は、そうでない子供に比べると、人間同士の「コミュニケーション能力」に長けていると言えます。それも言葉以外の手段、例えばジェスチャー、表情、姿勢などによる「コミュニケーション」です。なぜなら、当然のことながら、残念ですが動物と人間は共通の言語を持っていませんので、言語での「コミュニケーション」以外で会話をすることになります。そういう経験をすることによって、言葉と動物の気持ちとが分かるようになってきます。そしてそれを続ける事によって、人間に対しても言葉を超えた理解力を身に付ける事ができ、動物の気持ちを理解するのと同じ様に、相手の表情やジェスチャーなどを無意識のうち理解し、「コミュニケーション」を取れるようになってくるのです。その他にも子供たちは動物から色々な事を学びます。動物が困っている時や驚いた時などにとる行動を自分と重ね合わせ、そ

の行動が良い行動なのか、それとも悪い行動なのかを考え、知る事もあります。そして子供たちが動物のお世話をすることによって、強い責任感を養う事ができます。それだけではなく、自分よりも小さな動物を傷つけないお世話をする事、あるいは自分よりも大きな動物と触れ合う事によって「潤滑油」の様な役割をしてくれます。動物の顔を見ているだけで自然と笑顔になったり、動物の体に触れ、心臓の鼓動や温かさを感じるだけで気分が穏やかになり、喧嘩をしても自然と仲直りできるような事も多々あります。しかし、このように子供たちと動物をふれあわせる為には、動物を常に幸せな状態でいさせてあげなくてはなりません。不幸な状態の動物と子供たちをふれあわせてしまったのでは、子供たちにも大きなストレスをかける事になり、せっかくのふれあいが台無しになってしまいます。そのためには普段から大人が動物達に思いやりを持って接し、大切にしていけるのが鉄則です。それだけではなく、動物を愛護する精神も一緒に学べると最高です。もちろんそれぞれのお宅の事情がありますので、全ての方が動物と共に暮らし、全ての子供たちが幼少期から動物と接する事は不可能ですが、幼稚園や学校、お友達のお家の動物、ふれあい動物園などで、できるだけ動物とふれあうチャンスを作ってあげて下さい。そうすれば命の重みが分かる心優しい人になってくれるはずです。又、そういう子供たちが増える事によって、不幸な動物を増やさない事にもつながります。

詩月財団では今後子供たちに命の大切さ、動物の温かさを感じてもらえるような命の授業、命の勉強会を開催していきたいと考えています。

(詩月)